

## 第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易について

——リビア王朝時代の木棺研究を中心に——

石 崎 野々花

### はじめに

紀元前11～8世紀の東地中海交易は、フェニキアの台頭によって後期青銅器時代とは異なる様相を呈する。この時期は、エジプトでは第3中間期（第21～25王朝）、フェニキアでは鉄器時代I～IIにあたる。第21王朝時代のエジプトでは、新王国時代が終焉を迎える、南北エジプトを異なる政体が治めていた。その後、第22王朝シェションク1世治世下に南北エジプトは再統一され、オソルコン2世治世頃まで統一状態が維持されていた。しかし、シェジョンク3世以降は、テーベや下エジプトに再び複数の政体が並立する状況となった。一方のフェニキアでは、レバノンの地中海沿岸で発展した都市が東地中海交易に従事していたことが知られている。この時期の東地中海交易は、大国が管理する交易から、商人が損益を計算するような交易形態へ変容する画期であるとして、その実態についての研究が進められてきた（Manning, 2018, pp. 41-45; Liverani, 2003, p. 133）。

エジプトとフェニキアが交易関係を結んでいたことは明白だが、その様相や変遷については具体的に考察されてこなかった。そこで本稿では、フェニキアからの輸入品である木材の分析を通して、両者の交易について再考したい。特に、第21王朝からリビア王朝（第22～24王朝）時代に焦点をあてる。

なお本稿の編年は、ホルヌンクら（Hornung, Krauss, & Warburton, 2006）とアウベ（Aubet, 2001）に依拠した。

### 1. 第3中間期のエジプトとフェニキアとの交流

第3中間期のエジプトとフェニキアとの交易は、文字・考古資料からその存在が示唆されている。当時の交易を直接的に示した資料としては、『ウェンアメンの航海記』を挙げられる。『ウェンアメンの航海記』は、第20王朝ラメセス11世の治世下に、ビブロスへ木材提供を依頼した際の報告書である。そこには、使節ウェンアメンがタニスの後ろ盾を得て、フェニキアの都市であるビブロス（Byblos）から木材を得る内容（杉, 屋形, 1978, pp. 493-500）や、シドン（Sidon）にタニスで交易に従事しているフェニキア商人の船が停泊している描写が記されている（杉, 屋形,

1978, p. 497)。これらの記述からは、第20王朝末にタニスとフェニキアの港湾都市で結ばれていた交易関係の存在を読み取れる。続く第21王朝時代の交易を明確に示す文字資料は確認されていないが、リビア王朝時代の資料は報告されており、第22王朝シェションク1世やオソルコン1世の名前が刻まれた彫像がビブロスから出土している (Clermont-Ganneau, 1903; Dussaud, 1925)。彫像の存在からは、エジプトとビブロスの協力関係が第22王朝まで継続していた状況が推察されている (Kitchen, 1986)。

また、考古資料からも両者の交流は裏付けられている。たとえば、レバノンのサレプタ (Sarepta) 遺跡から出土した魚骨にはナイル川を原産とする種が含まれていた (Van Neer, et al., 2004, pp. 118, 120)。さらに、ティルス (Tyre) やアクジブ (Achziv)、ビブロスなどの遺跡からは、エジプト製あるいは模倣品のスカラベが発見されている (Boschloos, 2014; Keel, 1997; Gamer-Wallert, 2004)。魚は、『ウェンアメンの航海記』でエジプトが差し出した品目にも含まれており (杉, 屋形, 1978, pp. 498)、スカラベの存在とともに両者の間に何らかの交流があったことを示す資料だといえる。一方のエジプトでも、ヘラクレオポリス (Heracleopolis) やマトマル (Matmar) といった遺跡でフェニキア土器の出土が報告されている (Brunton, 1948; Padro, 1999, pp. 103-105; Lopez Grande, Quesada Sanz, & Molinero Polo, 1995)。

このように、エジプト国内外で出土した資料には、エジプトとフェニキアの交易関係の一端が表れている。しかし、文字資料の乏しさも相まって、両者の交易の様相については不明瞭なままである。北レヴァントから出土したスカラベの研究では、その出土傾向から第22王朝時代に両者の交流が活発化した可能性が指摘されている (Boschloos, 2012)。一方で、エジプトから出土したフェニキア土器に関しては、各型式の出土傾向や年代について整理されているものの、輸入土器の分析に主眼を置いていないため、東地中海地域との交易が第3中間期を通して継続していたとの言及にとどまっている (Aston, 2009, p. 348)。そこで本稿は、第3中間期のエジプトとフェニキアの交易について再考することを目的に、フェニキアからの輸入品である木材に着目する。

## 2. 第3中間期の木材利用と木棺研究について

エジプトは第3中間期以前から東地中海地域や中央アフリカの木材を輸入し、利用してきた歴史を有する (Gale, Gasson, Hepper, & Killen, 2000)。

なかでも、フェニキアが位置する東地中海沿岸地域からは、主に針葉樹を入手していた。針葉樹は、エジプトに自生していないため、他地域から入手する必要がある。具体的には、レバノンスギ (*Cedrus libani* A. Rich.) やビャクシン属 (*Juniperus* L.)、イトスギ属 (*Cupressus* L.) などの利用が樹種同定の成果によって明らかになっている (Gale, Gasson, Hepper, & Killen, 2000; Davies, 1995)。これらは、東地中海地域に位置するレバノン山脈やタウロス山脈に分布する樹種である (Vidakovic, 1991; Marcysiak, et al., 2007)。

本稿が対象とする第21王朝からリビア王朝時代には、ティルスをはじめとするフェニキアの都市が東地中海沿岸地域に位置しており、他地域との木材交易に従事していたことが知られている (Meiggs, 1998)。『ウェンアメンの航海記』によると、エジプトもビブロスからレバノンスギを入手している。それ以降の状況を示す直接的な証拠は発見されていないが、歴史的背景やビブロス出土の彫像の存在を鑑みると、継続してフェニキアから木材を入手していたと考えられる。

フェニキアから輸入された木材で作られた木製品のひとつが木棺であり、本稿では木棺に使用された木材を分析対象とする。本稿が対象とする時期の木棺は、主にエジプト産の樹種で製作されているが、一部の木棺ではレバノンスギやマツ属 (*Pinus L.*) の輸入材が使用されている (Davies, 1995, p. 150)。なかでも、第21王朝時代の木棺は、木棺材の樹種についての研究が進められてきた。先駆的な研究は、ディール・エル=バハリから出土しカイロ博物館に収蔵された資料のカタログである (Daressy, 1909)。そこでは、詳しい樹種同定の方法は不明だが、各木棺の樹種について記載されている (Daressy, 1909)。その結果、第21王朝時代の木棺は主にシコモアイチジク (*Ficus sycomorus L.*) で製作されていることが明らかとなった (Daressy, 1909; Niwinski, 1988, p. 57)。近年に実施された樹種同定でも、同様の結果が得られている (Asensi Amorós, 2017; Jamen, 2016)。シコモアイチジクは、エジプトに自生する広葉樹の一種である。

また、一部の高官の木棺ではレバノンスギの使用が確認された (Daressy, 1909; Niwinski, 1988, p. 57)。第22王朝以降の木棺については、輸入材が多いと指摘されているが、詳細は不明である (Taylor, 1989, p. 48)。レバノンスギやマツ属は、エジプトには自生せず、東地中海地域に分布しており、フェニキアから輸入された可能性が高いといえる。

また、木棺はほかの木製品よりも、使用時期や所有者の社会階層を推定しやすいという分析上の利点がある。木棺には、被葬者を宗教的に保護するために、様々な図像・銘文が描かれている。そこには、被葬者の名前・称号が記されている場合があり、被葬者の社会階層を知るための手がかりとなる。また、色調や図像構成に基づく編年研究も進められており、型式から使用時期を推定することが可能である (Aston, 2009, pp. 269-288; Niwinski, 1988)。

このことから、木棺材の樹種構成を分析することで、フェニキアから輸入された木材が、どのような社会階層の人々に、どの程度使用されているのか、およびその変遷が明らかになると考えられる。

### 3. 分析方法

分析は、第21王朝からリビア王朝時代に使用されていた112点の木棺を対象に、以下の手順で進める。

- ①先行研究による木棺の編年を基準に分析対象資料を時期別に分類する。
- ②木棺材を自生材もしくは輸入材に分類し、樹種選択における時期差を明らかにする。

③輸入材を使用した木棺所有者の称号を時期別に比較し、樹種選択における階層差とその変遷を明らかにする。

④分析結果をもとに、第3中間期のエジプトと地中海交易との関係について考察する。

なお、分析対象資料はテーベから出土した資料が中心だが、19・20世紀に購入され、出土地不明のまま博物館に収蔵されている資料も分析対象に含める。以下では、各分析項目の詳細について述べる。

①木棺の時期別分類は先行研究の編年に依拠する。第3中間期の木棺は、大きく3タイプに分類されている。おおよそ、タイプ1は第21王朝から第22王朝オソルコン1世治世下まで、タイプ2は第22王朝初頭から第25王朝成立頃まで、タイプ3は第25王朝成立後に使用されたと考えられている（Taylor 2003b; Aston, 2009, pp. 269-288）。本稿では、タイプ1とタイプ2に属する資料が分析対象である。

タイプ1は、黄色の下地に緻密な図像が描かれるのが特徴の型式である。埋葬時には、2～3点の木棺およびミイラボードを入れ子状に納めて使用される。ミイラボードとは、木製あるいはカルトナージュ製の木棺棺蓋に似た形状の装具である。この型式は、第21王朝から第22王朝オソルコン1世治世まで使用されていた。（van Walsem, 1997, p. 357）。同様に黄色が下地の木棺は第18王朝後半から用いられている。新王国時代と第21王朝に使われていた木棺の区別は、腕と手、襟飾りの差異に基づく。新王国時代の黄色木棺では、腕は襟飾りの下に表現されるが、手は襟飾りの上に描かれている。一方で、第21王朝時代の黄色木棺では、腕と手の両方が襟飾りの上に表現されるか、襟飾りが腕を覆う程長く描かれる（Niwinski, 1988, pp. 12-13, 69）。文字資料や共伴資料で区別できない場合は、以上の特徴を参考にする。

タイプ2は黒色や赤褐色を基調に、図像や銘文が描かれている。図像や銘文の密度がタイプ1よりも低い点が特徴である。下地を用いず、木材表面を露出させている例も見られる。タイプ2には、ミイラボードではなくカルトナージュ製の棺が共伴する。カルトナージュは石膏や亜麻布、パピルスなどを重ね合わせた素材のことで、古王国時代から使用してきた。カルトナージュ棺とは、その素材を人型棺の形状に成形し、内部にミイラを入れて背面で縫い合わせた棺のことである。カルトナージュ棺は基本的にタイプ2と共に出土し、タイプ1と共に出土した事例はサッカラで発見された1例のみである。テーベからは両者が共伴した出土例は報告されていない。埋葬時には、1～2点の木棺とカルトナージュ棺が組み合わせられることもあれば、それぞれ1点ずつの場合もある。タイプ2は、棺蓋の装飾に応じてタイプ2a、2b、2cに細分されている（Taylor, 2003b）。このうちタイプ2aは、類似した木棺がタイプ3にも見られる。そこで、タイプ2aの場合は、カルトナージュ棺を共伴している資料のみを分析対象とした。



図1 木棺タイプ分類の例

②樹種の分類は、木棺を構成する木棺材ごとに行なう。分析対象資料の木棺は丸木彫りではなく、複数の部材で組み立てられている（図2）。そのため、それぞれの部材で異なる樹種が用いられている可能性がある。そこで、木棺ごとではなく、木棺を構成する部材ごとに分類する方法を選択した。ゆえに、ひとつの木棺から複数の木棺材を分類できる場合もあるが、分類できる点数は各資料の保存状態によって一様ではない。主な分析対象箇所は、棺身側面や棺蓋脛部といった大型の部材である。そのうち、破損などによって木材の表面を観察できる箇所を対象とした。釘やダボなど小型の部材は、先行研究で樹種同定結果が判明している場合のみ分析対象資料に含めた。また、ひとつの木棺を構成する複数の木棺材が、自生材あるいは輸入材として同じように分類されていても、同一樹種であるとは限らない。今後は、樹種を詳細に同定していく必要があるが、本稿では自生材か輸入材かに大別し、全体的な傾向を把握する。

また、自生材か輸入材かの分類は目視によって行なう。顕微鏡を用いた樹種同定によって各樹種を決める方法が基本だが、エジプトの植生を鑑みると、目視の観察でも自生材か輸入材かに大別できる。

古代エジプトで使用が確認されている樹種は先行研究によって網羅的に整理されている（Gale, Gasson, Hepper, & Killen, 2000; Lucas & Harris, 1962）。これらの樹種は、エジプトに生えている自生材か周辺地域からの輸入材かに大別することができる（図3）。さらに、自生材と輸入材を構成する樹種は、木目・光沢の明瞭さや表面の粗さといった視覚的特徴に差異がある。まず、自生材はシコモアイチジクやアカシア属（*Acacia* Mill.）、ギヨリュウ（*Tamarix aphylla* L. Karst.）といった広葉樹で占められており、木材表面が粗く通直な木目や光沢を確

認しづらい特徴をもつ。一方、輸入材はレバノンスギやホソイトスギ (*Cupressus sempervirens* L.) などの針葉樹に加えて、アフリカンブラックウッド (*Dalbergia melanoxylon* Guill. and Perr.) やトルコカシ (*Quercus cerris* L.) などの広葉樹で構成されている。なかでも、木棺材として利用される輸入材はレバノンスギを中心とする針葉樹である。これらの樹種は、木材表面が滑らかで直通な木目や光沢も確認しやすく、自生材とは対照的な特徴をもつ。このような視覚的特徴は、先行研究でも肉眼観察で木材を分類する際の基準として利用されている (Cooney, 2007, p. 206; van Walsem, 1997, p. 45)。

先行研究において樹種同定が実施されている場合は、その結果に依拠している。ただし、ダレッシーの先行研究 (Daressy, 1909) で報告されている樹種には、疑問視されている事例もある (van Walsem, 1997, p. 45)。そこで、実際に観察可能な資料のみを分析対象に含めた。

識別後は、識別結果をタイプごとに比較し、樹種選択の傾向を明らかにする。

なお、古代エジプトの木棺ではアフリカンブラックウッドが利用される場合がある。アフリカンブラックウッドは中央アフリカから輸入されていた広葉樹で、木材表面は褐色から黒色を呈する。硬質で加工が難しいものの、光沢があり高い装飾性を有する。比較的、木目や光沢を確認しやすい樹種だが、東地中海地域から輸入される樹種とは色調が大きく異なっている。そのため、東地中海地域から輸入された木材と区別することが可能であると判断した。また、樹

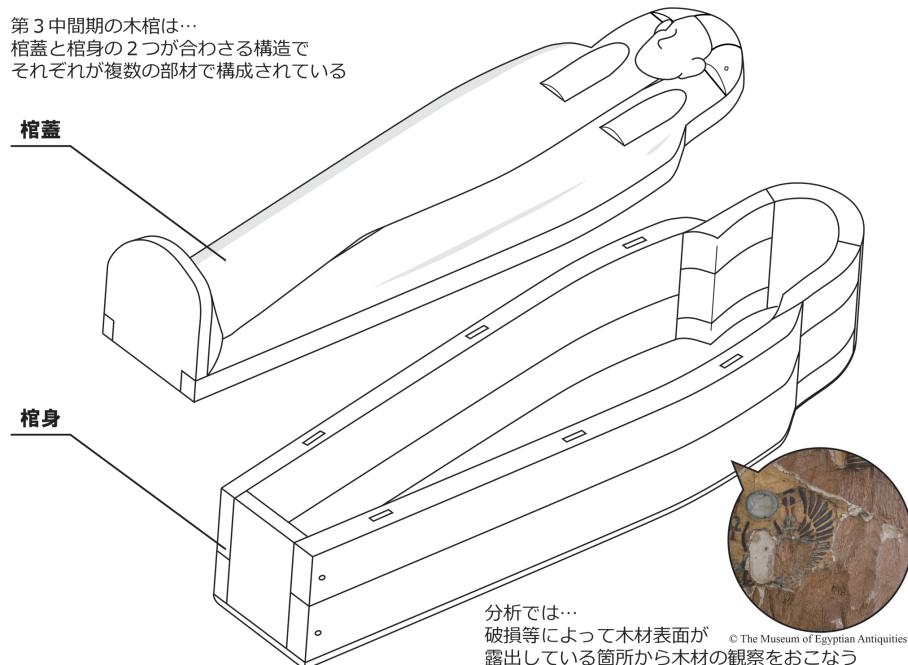


図2 木棺構造の模式図

### 第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易について



図3 古代エジプトの木棺材として使用されていた樹種の例

種同定を実施した先行研究では、第3中間期の木棺で使用された例は報告されておらず (Davies, 1995)、分析対象に含まれる可能性も低いと考えられる。

③木棺に記されている木棺所有者の称号を抽出し、タイプ間で比較することで、木棺材の樹種選択における階層差とその変遷を明らかにする。そのため、木棺所有者のもつ称号から、その人物が属する社会階層を推定したい。社会階層のモデルは、グラジェツキの先行研究を主に参照した。グラジェツキは、新王国時代の古代エジプトにおける社会階層を、王・高級官僚・下級官僚・労働者・社会的被排除者に分類した (Grajetzki, 2010)。そこでは、ファラオを頂点に、高級官僚や下級官僚が社会の上位層に位置し、下位層に農業・工業などを担う大多数の人々がいたと考えられている。最も社会的地位の高い階層には、ファラオに加えて、王妃などの親類も含まれる。つぎに社会的地位の高い人物は高級官僚で、宰相や宝物庫の長、王の書記などの称号を有している (Grajetzki, 2010, p. 189)。その下には、下級官僚や労働者が位置する。労働者層には幅があり、墓や副葬品を所有できる人々から副葬品を持たない人々まで様々であったと指摘されている (Grajetzki, 2010, pp. 194-195)。

また、第3中間期のアメン神官団の称号は司祭・神父の上位層とウアブ神官を中心とした下位層に分かれていたと考えられている (Kruchten, 1989; 藤井, 1996, p.6)。さらに司祭のなかでも第1司祭から第4司祭の序列をもつ司祭はアメン神官団で最も高い社会階層に位置していた。特に、アメン第1司祭は当時のテーベにおける最高権力者で、なかでもパネジェム1世や

メンケペルラーはファラオを自称していた。

本研究では、木棺所有者の称号を王族・高級官僚・下級官僚の3つに分類する。A 王族・最高級官僚には、ファラオやアメン第1司祭とその親類を含めた。B 高級官僚は宰相や將軍、知事といった行政統治に関する重要な称号をもつ人物と、序列つきの司祭を指す。つぎに、C 下級官僚には A 王族・最高級官僚や B 高級官僚に含まれない人物を分類した。アメン神官団の階層内では上位にあたる司祭や神父は、最高位にあたる序列つきのアメン司祭と区別するため C 下級官僚に含めた。

タイプ1の分析では、ニウインスキの集成 (Niwinski 1988, 103-184) から称号のヒエログリフもしくは英訳を抽出した。タイプ2の分析では、写真や実物の観察を通して称号を抽出している。なお、木棺以外の文字資料から木棺所有者の社会的地位が判明している場合は、その先行研究に依拠して分類する。

- ④ここまで分析結果を踏まえて、当時の木材交易について考察する。考察では、エジプトとフェニキアとの交流を示す資料を再確認しながら、紀元前11～8世紀における両地域間の交易の一端を明らかにしたい。

#### 4. 木棺材の樹種選択における時期差

まずは、木棺材を自生材あるいは輸入材に分類し、樹種選択における各タイプの傾向を明らかにする。分析対象資料は112点で、先行研究に基づいてタイプ別に分類した。その結果、76点はタイプ1、36点はタイプ2に属する。

タイプ1の木棺76点からは、146点の木棺材を観察することができた。分類結果は、91点は先行研究の記載、25点は資料調査での肉眼観察、30点は写真での観察に基づいている。資料調査を実施した25点のうち16点は、資料を観察したうえでダレッシー (Daressy, 1909) が記載した樹種を採用した。その結果、自生材製の木棺材は135点、輸入材製は11点であった(図4)。自生材製のうち100点は樹種まで判明している。内訳は、シコモアイチジクが78点、アカシアが10点、ギヨリュウが8点、キリストノイバラが3点、ヤシが1点である。輸入材製で樹種が判明しているのは6点で、いずれもレバノンスギが属するヒマラヤスギ属である。

これらの木棺材を用いて、76点の木棺は製作されていることが分かった。使用している樹種を木棺ごとにまとめると、68点の木棺は自生材のみ、6点の木棺は輸入材のみで製作されていた(図5)。2点の木棺では自生材と輸入材の併用を確認できた。なお、JE 26215はシコモアイチジクと報告されているが (Daressy, 1909, p. 40)、観察の結果、輸入材と自生材との併用であると分類した。この分析結果は、タイプ1の多くはシコモアイチジクで製作され、一部の高官のみが針葉樹を用いているという先行研究の指摘を追認する (Niwinski, 1988, p. 57)。

つぎに、タイプ2の木棺36点からは121点の木棺材を観察できた。分類結果は、17点は先行研

### 第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易について

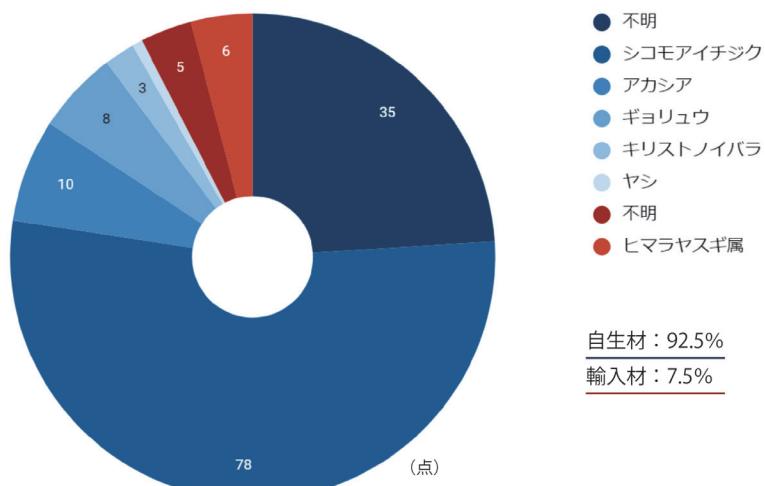


図4 タイプ1木棺材の樹種構成比

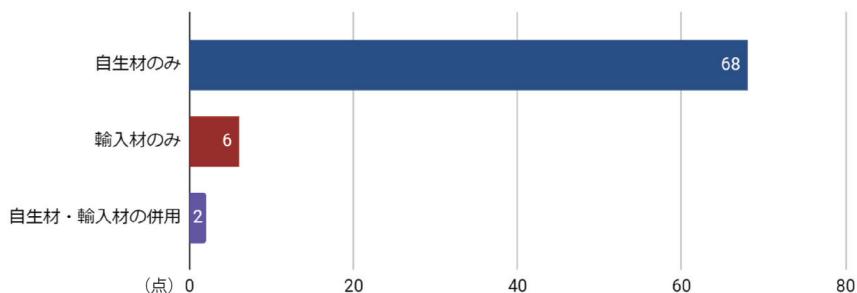


図5 タイプ1木棺の樹種構成

究の記載、36点は資料調査での肉眼観察、68点は写真での観察に基づいている。その結果、自生材製の木棺材は26点、輸入材製の木棺材は95点であった（図6）。自生材のうち樹種が判明しているのは3点で、シコモアイチジクとアカシア、ギヨリュウが1点ずつ確認された。輸入材で樹種が判明しているのは2点で、いずれもレバノンスギである。さらに13点の木棺材については、針葉樹であるとカタログや先行研究に記されていた。

タイプ2の木棺36点は、これらの木棺材を用いて製作されていた。木棺ごとに結果を整理すると、8点の木棺は自生材のみ、25点の木棺は輸入材のみで製作されていた（図7）。加えて、3点の木棺では自生材と輸入材の木棺材が併用されていた。なお、自生材はダボや木釘としても多用されるため（米山, 2016, pp.31-32; Davies, 1995, p. 148）、輸入材のみに分類された木棺でも自生材が用いられている可能性は高い。

ここまで分析で、タイプ1では146点中11点（約7.5%）、タイプ2では121点中95点（約

78.5%）の木棺材が輸入材であることが分かった。木棺単位で算出すると、タイプ1では76点中8点、タイプ2では36点中28点の木棺で輸入材が用いられている。つまり、タイプ2になると、輸入材を選択する傾向が強まることが明らかとなった。

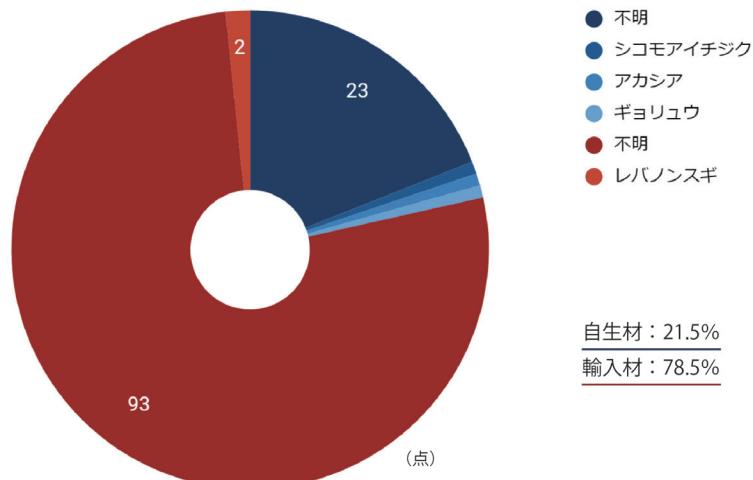


図6 タイプ2木棺材の樹種構成比

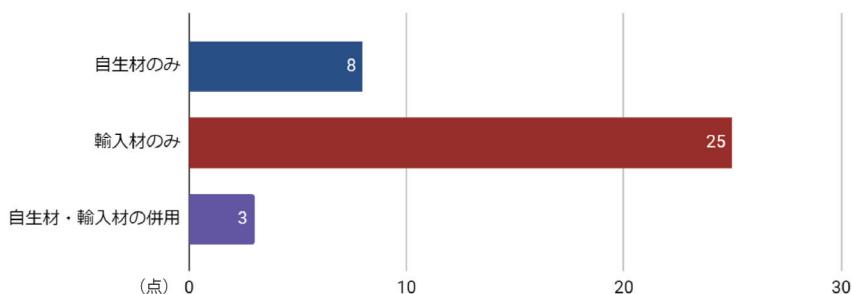


図7 タイプ2木棺の樹種構成

## 5. 木棺材の樹種選択における階層差

1つめの分析では、木棺材の樹種をタイプ間で比較すると、タイプ2では輸入材が多用されていることが明らかになった。2つめの分析では、木棺所有者の社会階層を比較し、木棺材の樹種選択における階層差とその変遷を明らかにする。

タイプ1では76点の木棺を56名が所有しており、このうち34名の称号を抽出することができた。

抽出した称号から、木棺所有者の社会階層を分類すると、8名はA王族、2名はB高級官僚、25名はC下級官僚に属していた。この結果と木棺の樹種を整理すると、輸入材製の木棺6点は、A王族の4名、C下級官僚の2名に所有されている。一方で、自生材で製作された木棺68点は50名によって所有されていた。そのうち、28名の称号を確認できた。28名のうち、A王族は2名、B高級官僚は2名、C下級官僚は24名であった。また、ノジェメト (JE26215) やナニイ (30.3.24a,b) の木棺では、輸入材と自生材が併用されていた。両者ともA王族に属する人物である。

この結果には、社会階層の高い人物は輸入材製の木棺を所有しやすい傾向が表れていた。しかし、すべてのA王族やB高級官僚が輸入材製の木棺を所有しているわけではなかった。たとえばノジェメト (JE26215) の木棺は、金箔や象嵌で装飾されているものの、棺身頭部は自生材製であり、木棺全体が輸入材製ではなかった。彼女は、アメン第1司祭であったピアンキあるいはヘリホルの配偶者だと考えられている人物である (Pischikova, Budka, & Griffin, 2014, pp. 39-40; Aston, 2009, p. 22)。また、A王族に属するヘネトタウイ A (JE26204) やネシタネブアシェル (JE26202) の木棺でも、確認できる範囲には自生材が用いられていた。ヘネトタウイ A はラメセス11世の娘で、パネジェム1世の妃である。また、ネシタネブアシェルもパネジェム2世の娘であり、両者ともアメン第1司祭の親類にあたる。

タイプ2では36点の木棺を30名が所有しており、そのうち21名の称号を確認できた。その結果、3名がB高級官僚、18名がC下級官僚であった。輸入材製の木棺25点は、2名のB高級官僚、14名のC下級官僚、5名の称号不明者に所有されていた。一方で、自生材で製作された木棺8点は、3名のC下級官僚、3名の称号不明者が所有している。また、3点の木棺では輸入材と自生材が併用されていた。この3点の所有者は、B高級官僚が1名、C下級官僚が1名、称号不明者が1名である。つまり、タイプ2では、C下級官僚に属する人々も高い割合で輸入材を使用し、樹種選択における階層差は顕著でないことが分かった。

以上の分析から、タイプ1では、輸入材を使用した木棺の点数自体が少なく、それらは社会階層の高い人々が主に所有していることが明らかとなった。また、A王族・最高級官僚やB高級官僚が所有する木棺にも、自生材のみや自生材と輸入材を併用して作られている例が見られた。一方タイプ2では、輸入材を使用した木棺の点数が増加し、C下級官僚にも輸入材製の木棺が普及していた。つまり、木棺様式とともに、木棺材の樹種構成や輸入材を使用できる人々の社会階層が変化していることが分かった (図8)。

どちらのタイプにおいても、王族の木棺については、資料的制約のために不明なままである。タニスやメンフィスで発掘された王族の墓からは、銀棺や石棺とともに木棺片も出土している。これらの木棺には輸入材が使用されていたと推測されるが、残存状況が悪く報告されていないため現時点では検証できない。

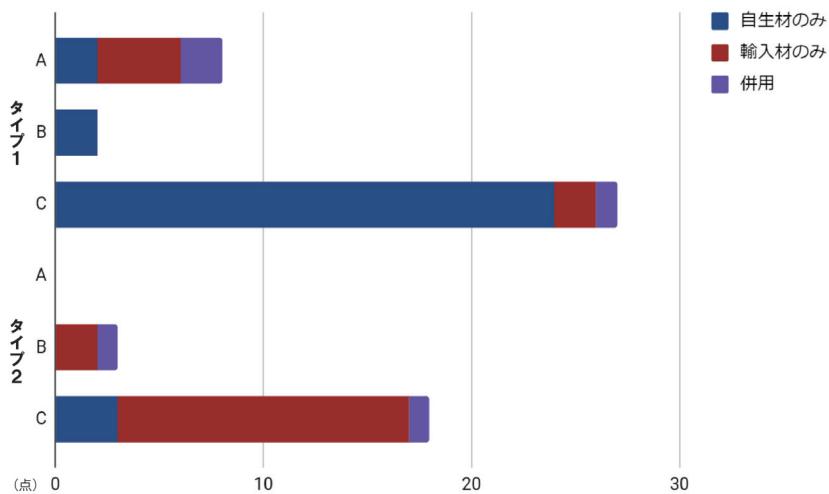


図8 社会階層ごとの木棺材樹種タイプ別比較

## 6. 考 察

分析の結果、タイプ1では自生材が多用されているが、タイプ2では輸入材が多用されていることが明らかになった。それに伴い、下級官僚が輸入材を選択する割合も増加していた。この結果から、タイプ2が使用された時期は、木棺の所有者や工房がより容易に輸入材を入手できる社会状況であったと想定される。

木材交易について考察する前に、木棺の再利用について述べたい。第3中間期の木棺、特にタイプ1は高い割合で再利用されている。イタリアに収蔵されているタイプ1の調査では、その61.5%が再利用という結果が提示された (Cooney, 2012, p. 25)。同時期の木棺だけでなく、第19・20王朝時代の木棺も第21王朝時代に再利用されていたのではないかと考えられている (Niwinski, 1988)。再利用された木棺やほかの木製品から転用された木材を使用している場合、木材が調達された時期は木棺タイプよりも遡ることになる。しかし、再利用率の高さを考慮しても、タイプ1では輸入材を多用していないため、タイプ1の時期には、輸入材を入手しづらい状況であったと考えられる。一方、タイプ2の再利用については詳細に検討されていない。ただし、タイプ2では塗装せずに木材表面を露出させる場合 (タイプ2a・2b) もあり、タイプ2以前の木棺を再利用することは難しいと考えられる。そのため、タイプ2の木棺にそれ以前の木棺が転用された割合もタイプ1より低くなると推察される。よって、木棺や木棺材の再利用を鑑みても、タイプ1に比べると、タイプ2が使用されていた時期は輸入材を選択しやすい状況であったと言える。

また、そのような状況は、エジプトとフェニキア間での交易が活発化したことで生じたと考え

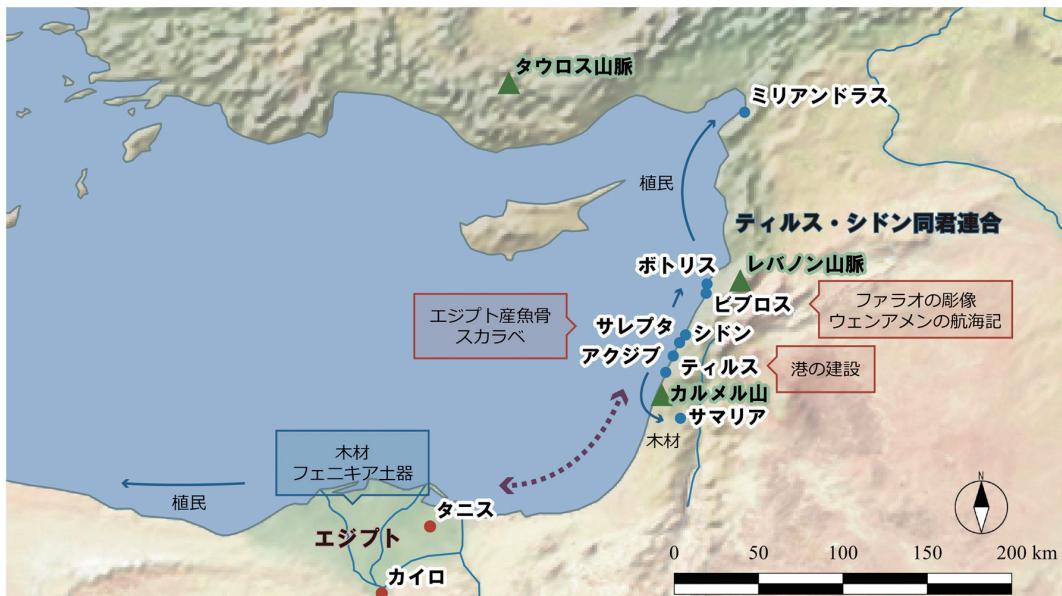


図9 エジプトと東地中海周辺地図

られる。以下では、他の輸出入品や歴史背景を再確認しながら考察を進めたい。

まず、エジプト国内外から出土した相互の輸出入品をみてみると、タイプ2成立と同時期に増加する傾向にあった。たとえばエジプトで出土したフェニキア土器がその傾向にある。先行研究で触れたように、フェニキア土器はテル・エル＝レタバやマトマル、ヘラクレオポリスといった遺跡から出土している (Aston, 2009, p. 318; Brunton, 1948; Lopez Grande, Quesada Sanz, & Molinero Polo, 1995; Padro, 1999, pp. 103-105)。それらの輸入土器を含めた第3中間期の土器はアストンによって集成され、類例やフェニキアでの土器編年に基づいて年代づけられた。そこでは、エジプトから出土したフェニキア土器はすべて紀元前9～7世紀に属すると推定されている。(Aston, 2009, pp. 318-319, 348)。それ以前の時期に関しては、パレスチナからの輸入土器が出土しているものの、フェニキア土器は報告されていない。

一方、フェニキアでは、エジプト産あるいは模倣品のスカラベが第22王朝頃から増加傾向にある。スカラベはティルスやアクジブといったフェニキアの遺跡から出土し、編年や出土層位から年代が推定されている (Boschloo, 2014; Gamer-Wallert, 2004; Keel, 1997)。先述したように、シリアとレバノンから出土したスカラベは集成され、紀元前2～1千年紀の出土傾向について分析された。それによって、エジプトから輸入されたスカラベは、紀元前1千年紀には全体的に減少するが、第22王朝との並行期には増加することが判明している (Boschloo, 2012, pp. 179-180)。また、紀元前9～7世紀頃には、ティルスの領域下でスカラベ製作が行なわれていたとも指摘されている (Boschloo, 2014, p. 19)。

さらに、両者の内政や対外政策からも、活発な交易を可能にした社会状況が推測される。紀元前10世紀のフェニキアでは、ティルスがヒラム1世のもとで台頭し始めていた。紀元前9世紀には、エトバアルがティルスを中心にティルス・シドン同君連合を形成し、西方への交易拡大政策にも乗り出している。同時期には、イスケンデルンやビブロスの北に位置するボトリス、アウザ(リビア)への植民を行なった。これによって、ティルスの支配領域はビブロスからカルメル山付近まで拡大することとなった(Aubet, 2001, pp. 46-47, 66-69)。その後も勢力は拡大し、ピグマリオンの治世には、カルタゴにも植民地を樹立している。これらの植民地は、木材や工芸品を交易する際の拠点でもあった。

このような背景のなかで、ティルスは少なくともヒラム1世治世下には他地域へ木材を輸出している(Meiggs, 1998, pp. 69-71)。これは、ヒラム1世がサマリアにレバノンスギとイトスギを提供したという旧約聖書の記載に基づく(列王記上5:24)。その後、エトバアルの治世には、エジプトへの木材供給を担ってきたビブロスを支配下に置き、ティルスの南には「エジプトの港」と通称される港を新設している。リビアやカルタゴにも植民地を樹立しており、この頃からエジ

表1 第3中間期のエジプトとティルスの年表

木棺 様式	年代 (紀元前)	エジプト	ティルス
タイプ1	1050	スメンデス1世	
		アメンエムニスウト	
		プスセンネス1世	
		アメンエムオペ	
		大オソルコン	
	950	シアメン	ヒラム1世
		プスセンネス2世	
		シェションク1世	
		オソルコン1世	バアルエセル1世
		タケロト1世	
	900	シェションク2世	アドバストラト
		オソルコン2世	
		シェションク3世	エトバアル
		シェションク3a世	
		パミ	バアルアヅル2世
タイプ2	800	シェションク5世	マタン2世
			ピグマリオン
	750		エトバアル2世

プトを含む北アフリカとの交易にも注力し始めたと考えられる。また、エトバアルが樹立した拠点の近くには、タウロス山脈やレバノン山脈といった針葉樹の産地がある。木材産地の近くに拠点を有することは、木材の切り出しや運搬にも有益である。木材調達や交易に有利に働く状況は、より大規模な木材交易を可能にしたと推察する。

一方、同時期のエジプトでは第22王朝が成立し、南北エジプトの統一が維持されていた。そのような状況下で、デルタ地帯では耕作地が新たに開拓されたと指摘されている。これは、神殿への土地の寄進を記録した寄進ステラが第22・23王朝時代に増加し、特にエジプト北部から多く出土することに基づく（Taylor, 2003a, p. 344）。耕作地の拡大は穀物生産量の増加をもたらし、交易の活発化にも関連する可能性がある。『ウェンアメンの航海記』によると、ビブロスに対してエジプトが差し出した品にはレンズマメや亜麻布、パピルスなど植物由来の品目が含まれている（杉, 屋形, 1978, pp. 498）。後の時代にもエジプトは、穀物や亜麻布、パピルスをギリシャへ輸出していた（Austin, 1970, pp. 35-36）。つまり、食料となる植物や植物製品は、諸外国に対するエジプトの輸出品であり、フェニキアから木材を得る際にも同様であったと推測される。ゆえに、耕作地の拡大によって、輸出品をより多く生産できる環境が生じたことは、輸入品の入手しやすさにも結びついたと考えられる。収穫された植物が輸出された確証はないが、第22王朝以降は、少なくとも第21王朝時代よりも輸入品を得やすい状況にあったことは確かであろう。

以上のことから、両地域間の交易を活発化しうる状況が、ティルス・シドン同君連合の植民地樹立やデルタ地帯での耕作地拡大によって生じていたと考えられる。つまり、輸出入品の出土状況や歴史背景からは、紀元前9世紀頃に木棺型式が移行し、木棺材として輸入材が普及した背後には、エジプトとティルス・シドン同君連合との交易が確立した状況があったと想定される。

## 7. 結論

本稿は、木棺材の樹種構成比や所有者の社会階層との対応関係の分析を通して、第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易の一端について明らかにした。分析の結果、タイプ2の成立を画期に輸入材の使用割合が増加する傾向を見出した。同時に、輸入材を使用できる社会階層も拡大していた。この背後には、フェニキアとの交易が活発化し、木棺の所有者や木工工房が輸入材入手しやすい社会状況があったと推測される。

この視座に立ち、他の輸出入品を整理してみると、同じく第22王朝を境に増加していることが分かった。また、両者の対外政策や内政状況を見直してみても、交易関係の強化を可能にする状況を確かめられた。紀元前9世紀のフェニキアでは、ティルス・シドン同君連合が台頭し、西方への交易拡大政策の一環として、針葉樹の産地付近に植民地を設けていた。針葉樹の産地付近に複数の拠点を有することは、木材の調達を容易にしたと考えられる。そして、木材調達の容易化は、大規模な木材交易にも結びついているだろう。一方のエジプトでは、第22王朝以降、デルタ

地帯において耕作地が新たに拡大されていた。耕作地の拡大は、フェニキアへの輸出品である食糧や亜麻布、パピルスの生産量増加と関連している。つまり、木棺材として輸入材が普及した背後には、輸出入品の生産量増加をひとつの要因に、両地域間の交易の規模が拡大した社会背景があると考察した。

## おわりに

本稿では、エジプトとフェニキアの交易関係が紀元前9世紀頃に強化されることをエジプト側の資料から示した。フェニキアとの交易に注目することで、第3中間期の経済活動について新たな側面を明らかにすることことができた。しかし複数の政体が並立する状況における交易の形態や輸入品の国内流通については不明瞭なままであり、課題として残った。

### 謝辞

本稿の執筆にあたり、早稲田大学文学学術院教授近藤二郎先生にご指導を賜った。また資料調査については、早稲田大学文学研究科に在籍されている福田莉紗氏にご協力を賜った。この場を借りてお礼を申し上げたい。なお、本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：18J22188）による成果を含む。

### 引用文献

- Asensi Amorós, M. V. (2017). The wood of the Third Intermediate Period coffins: The evidence of analysis for the Vatican Coffin Project. In A. Amenta, & H. Guichard (Eds.), *Proceedings first Vatican coffin conference: 19-22 June 2013* (Vol. 1, pp. 45-50). Città del Vaticano: Edizioni Musei Vaticani.
- Aston, D. A. (2009). *Burial Assemblages of Dynasty 21-25: Chronology, Typology, Developments*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Aubet, M. E. (2001). *The Phoenicians and the West* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Austin, M. M. (1970). *Greece and Egypt in the archaic age*. Cambridge.
- Boschloo, V. (2012). Egyptian and Egyptianising scarab-shaped seals in Syria and Lebanon. *Bibliotheca Orientalis*, 69(3-4), 175-181.
- Boschloo, V. (2014). Scarabs and Seals from the 2002 and 2004 Seasons at Tyre Al-Bass. In M. E. Aubet, F. J. Núñez, & L. Trellisó (Eds.), *The phoenician cemetery of tyre-al bass II: archaeological seasons 2002-2005* (Vol. 1, pp. 381-404). Beyrouth: Lebanese Direction Générale des Antiquités.
- Boschloo, V. (2014). Tyre, Achziv and Kiton: evidence for a phoenician iron age II scarab seal workshop. In A. Lohwasser (Ed.), *Skarabäen des 1. Jahrtausends: ein Workshop in Münster am 27. Oktober 2012* (Vol. 269, pp. 5-36). Göttingen, Fribourg: Vandenhoeck & Ruprecht Göttingen & Academic Press.
- Breasted, J. H. (1962). *Ancient records of Egypt: Historical documents from the earliest times to the Persian conquest* (Vol. 1). New York: Russell & Russell.
- Brunton, G. (1948). *Matmar*. London: Bernard Quaritch.
- Clermont-Ganneau, C. (1903). Inscription égypto-phénicienne de Byblos, 47<sup>e</sup> année, N. 4. *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 4, 378-385.
- Cooney, K. M. (2007). *The cost of death: The social and economic value of ancient Egyptian funerary art in the Ramesside period*. Leiden: Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.

### 第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易について

- Cooney, K. M. (2012). Coffin reuse in the Twenty-First Dynasty: The demands of ritual transformation. *Backdirt*, 22-33.
- Daressy, G. (1909). *Cercueils des cachettes royales, Catalogue General du Musee du Caire, 61001-61044*. Cairo: l'Institut français d'archéologie orientale.
- Davies, W. V. (1995). Ancient Egyptian timber imports: an analysis of wooden coffins in the British Museum. In W. V. Davies, & L. Schofield (Eds.), *Egypt, the Aegean and the Levant : interconnections in the second millennium BC* (pp. 146-156). London: British Museum Press.
- Dussaud, R. (1925). Dédicace d'une statue d'Osorkon I par Eliba'al, roi de Byblos. *Syria*, 6(2), 101-117.
- Gale, R., Gasson, P., Hepper, N., & Killen, R. G. (2000). Wood. In I. Shaw, & P. Nicholson (Eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology* (pp. 334-371). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gamer-Wallert, I. (2004). The Scarabs. In M. E. Aubet (Ed.), *The Phoenician cemetery of Tyre-Al Bas: Excavations 1997-1999* (pp. 397-413). Beyrouth: Lebanese Direction Générale des Antiquités.
- Germer, R., Kischkowitz, H., & Lüning, M. (2009). *Berliner Mumien geschichten: Ergebnisse eines multi-disziplinären Forschungsprojektes*. Regensburg: Verlag Schnell und Steiner.
- Grajetzki, W. (2010). Class and Society: Position and Possessions. In W. Wendrich (Ed.), *Egyptian Archaeology* (pp. 180-199). Chichester: Wiley-Blackwell.
- Hornung, E., Krauss, R., & Warburton, D. (Eds.). (2006). *Ancient Egyptian chronology*. Boston: Brill.
- Jamen, F. (2016). *Le cercueil de Padikhonsou au musée des Beaux-Arts de Lyon (XXIe dynastie)*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Keel, O. (1997). *Corpus der Stempelsiegel-Amulette aus Palästina/Israel: Von den Anfängen bis zur Perserzeit. Katalog. Band 1*. Fribourg: Göttingen: Universitätsverl; Vandenhoeck & Ruprecht, cop.
- Kitchen, K. A. (1986). *The Third Intermediate Period in Egypt* (2nd ed.). Warminster: Aris & Phillips.
- Kruchten, J. M. (1989). *Les annales des prêtres de Karnak (21-23mes dynasties) et autres textes contemporains relatifs à l'initiation des prêtres d'Amon*. Leuven: Departement Oriëntalistiek.
- Liverani, M. (2003). The influence of political institutions on trade in the Ancient Near East (Late Bronze to Early Iron Age). In C. Zaccagnini, *Mercanti e politica nel mondo antico* (pp. 119-137). Roma: L'Erma di Bretschneider.
- Lopez Grande, M. J., Quesada Sanz, F., & Molinero Polo, M. A. (1995). *Excavaciones en Ehnasya el-Medina*. Madrid.
- Lucas, A., & Harris, J. R. (1962). *Ancient Egyptian materials and industries* (4th ed.). London: Edward Arnold.
- Manning, J. G. (2018). *The open sea: The economic life of the ancient Mediterranean world from the iron age to the rise of Rome*. Princeton: Princeton University Press.
- Marcysiak, K., Mazur, M., Romo, A., Montserrat, J. M., Didukh, Y., Boratyńska, K., . . . Boratyński, A. (2007). Numerical taxonomy of Juniperus thurifera, J. excelsa and J. foetidissima (Cupressaceae) based on morphological characters. *Botanical Journal of the Linnean Society*, 155, 483-495.
- Meiggs, R. (1998). *Trees and timber in the ancient Mediterranean world*. Oxford: Clarendon Press.
- Niwinski, A. (1988). *21st Dynasty Coffins from Thebes: Chronological and Typological Studies*. Mainz am Rhein: Verlag Philipp Von Zabern.
- Padro, J. (1999). *Etudes historico-archéologiques sur Heracleopolis Magna: La nécropole de la muraille méridionale*. Barcelona.
- Petrie, F., & Duncan, G. (1906). *Hyksos and Israelite cities*. London: British School of Archaeology in Egypt.
- Pischikova, E., Budka, J., & Griffin, K. (Eds.). (2014). *Thebes in the First Millennium BC*. Cambridge Scholars Publishing.

- Taylor, J. H. (1989). *Egyptian Coffins*. Aylesbury: Shire Publications.
- Taylor, J. H. (2003a). The Third Intermediate Period (1069-664BC). In I. Shaw (Ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt* (2nd ed., pp. 324-363). New York: Oxford University Press.
- Taylor, J. H. (2003b). Theban Coffins from the Twenty-second to the Twenty-sixth Dynasty: Dating and Synthesis of Development. In N. Strudwick, & J. H. Taylor (Eds.), *The Theban Necropolis Past, Present and Future* (pp. 95-121). London: The British Museum Press.
- Van Neer, W., Lernau, O., Friedman, R., Mumford, G., Poblóme, J., & Waelkens, M. (2004). Fish remains from archaeological sites as indicators of former trade connections in the Eastern Mediterranean. *Paléorient*, 30(1), 101-147.
- van Walsem, R. (1997). *The Coffin of Djedmonthuiufonkh in the National Museum of Antiquities at Leiden*. Leiden: Egyptologische Uitgaven.
- Vidaković, M. (1991). *Conifers: morphology and variation*. Zagreb: Grafičko Zavod Hrvatske.
- 杉 勇、屋形禎亮「エジプト」『筑摩世界文学大系1 古代オリエント集』、1978年、筑摩書房。
- 藤井信之「タケロト2世治下におけるテーベ反乱—リビア朝治下エジプトのアメン神官団の検討から—」『地中海学研究』19号、3-35頁、1996年。
- 米山由夏『古代エジプトにおける木材選択利用の研究：木棺と弓を中心に』2016年、鶴見大学文学研究科修士論文（未公刊）

#### 図版出典

図1：以下の写真を使用して筆者作成。

- 1a : 筆者撮影
- 1b : Museo Arqueológico Nacional. (n.d.) 18257. <<http://ceres.mcu.es/pages/Main?idt=61&inventory=18257&table=FMUS&museum=MAN>> 2018/01/18
- 1c : The Metropolitan Museum of Art. (2000) Coffin Set of the Singer of Amun-Re, Henettawy. <<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/590951>> 2018/01/18
- 1d : The Cleveland Museum of Art. (n.d.) Coffin of Bakenmut. <[http://www.clevelandart.org/art/1914.561?collection\\_search\\_query=1914.561&op=search&form\\_build\\_id=form-kf16FrXum8wzVOdHdBBJ7IBi8PXQhDXz3MWk76P4uc&form\\_id=clevelandart\\_collection\\_search\\_form](http://www.clevelandart.org/art/1914.561?collection_search_query=1914.561&op=search&form_build_id=form-kf16FrXum8wzVOdHdBBJ7IBi8PXQhDXz3MWk76P4uc&form_id=clevelandart_collection_search_form)> 2018/01/03
- 2a : Kunsthistorisches Museum Wien. (n.d.) Mumienförmiger Sarg des Pa-di-set. <<http://www.khm.at/de/object/d10/4e27152/>> 2018/01/03
- 2b : (Germer, Kischkewitz, & Lüning, 2009, p. 81)
- 2c : (Aston, 2009, p. 278)

図2：筆者作成。

- 図3：(Gale, Gasson, Hepper, & Killen, 2000) の記載内容に基づいて筆者作成。以下、図内で使用した写真の出典。
- イチジクグワ（左）：Encyclopedia of Life. (n. d.) Image of Ficus sycomorus. <[http://www.eol.org/data\\_objects/32073199](http://www.eol.org/data_objects/32073199)> 2017/10/4
- イチジクグワ（右）：カイロ・エジプト博物館所蔵 CG61034。筆者撮影。
- ギヨリュウ（左）：Encyclopedia of Life. (n. d.) Tamarix aphylla 3. <[http://www.eol.org/data\\_objects/22634426](http://www.eol.org/data_objects/22634426)> 2017/10/4
- ギヨリュウ（右）：The Metropolitan Museum of Art. (n. d.) Chair for a Woman | New Kingdom. <<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/548636>> 2017/10/4
- アカシア（左）：Encyclopedia of Life. (n. d.) PIC\_RAH10023. <[http://www.eol.org/data\\_objects/23558641](http://www.eol.org/data_objects/23558641)> 2017/10/4

### 第3中間期のエジプトとフェニキアとの木材交易について

アカシア（右）：The Metropolitan Museum of Art. (n. d.) Table | Second Intermediate Period–early New Kingdom.

〈<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544802>〉 2017/10/4

レバノンスギ（左）：Encyclopedia of Life. (n. d.) File Cèdre du Liban Barouk 2005.jpg. 〈[http://www.eol.org/data\\_objects/27704281](http://www.eol.org/data_objects/27704281)〉 2017/10/4

レバノンスギ（右）：カイロ・エジプト博物館所蔵 JE26214。筆者撮影。

ピヤクシン（左）：iNaturalist.org. (n. d.) Greek Juniper (*Juniperus excelsa*) observed by trcarlisle 04:51 AM UTC on December 3, 2016. 〈<https://www.inaturalist.org/observations/5280745>〉 2017/10/4

ピヤクシン（右）：The Metropolitan Museum of Art. (n. d.) Canopic chest of Hapiankhtifi | Middle Kingdom. 〈<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/544327>〉 2017/10/4

コクタン（左）iNaturalist.org. (n. d.) African-blackwood (*Dalbergia melanoxylon*) observed by frasergear on June 29, 2017. 〈<https://www.inaturalist.org/observations/6858099>〉 2017/10/4

コクタン（右）：The Metropolitan Museum of Art. (n. d.) Chair of Reniseneb | New Kingdom. 〈<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/547687>〉 2017/10/4

図4：筆者作成。

図5：筆者作成。

図6：筆者作成。

図7：筆者作成。

図8：筆者作成。

図9：筆者作成。

表1：エジプトの年代は（Hornung, Krauss, & Warburton, 2006）、ティルスの年代は（Aubet, 2001）に基づいて  
筆者作成。